2016.10.22. 読売(27面)

新聞　（第3種郵便物認可）

乃木希典夫人の銅像再建

戦争で供出、70年ぶり

甲突川沿い 来月除幕式

鹿児島市出身で、日露戦争を陸軍大将として指揮した乃木希典の妻、静子（1859～1912年）を顕彰する銅像が11月、出生地である同市新屋敷町の甲突川沿いに、約70年ぶりに再建される。死後間もなく銅像が造られたが、戦時の混乱の中で取り壊されていた。再建に向けて奔走した市民団体は「明治期を生きた一人の女性としての静子夫人に、思いをはせてほしい」としている。（中村直人）

除幕式に向けて準備を進める奉賛会のメンバーら

再び銅像が建てられることになった乃木静子（乃木静子夫人奉賛会提供）

静子は薩摩藩医の四女。希典と結婚してからは、各地を転戦する夫に代わって家庭を支えた。希典が久しぶりに帰宅した際、「馬は丈夫に肥やしておきました」と話したというエピソードは、軍人の妻のあるべき姿として称賛された。一方、日露戦争では息子2人を失うなどの辛苦も味わっている。

明治天皇崩御の後、夫と共に殉死した。1919年、旧薩摩藩士によって遺徳をしのぶ銅像が建てられると、通学中の女学生が立ち止まって一礼するほど敬われていた。しかし、銅像は太平洋戦争末期に軍事資材として供出され、現在は台座のみが往時の名残をとどめている。

没後100年を機に、再び静子を顕彰しようとの声が上がり、有志らが2014年9月、「乃木静子夫人奉賛会」を発足。銅像の再建を呼びかけたところ、全国約3000の個人・団体から寄付が寄せられた。街頭での募金活動も行い、約800万円を集めた。

着物をまとった座像で、高さ約90チセン。残っている1辺四方の台座に据える。除幕式は、静子の誕生日にあたる11月27日に現地で行う予定。

奉賛会長の平瀬葉子さん(61)は「薩摩の女らしい忍耐強さで子どもを育て上げた、当時の女性の鑑。改めて遺徳をしのび、明治という時代に翻弄された生涯を次世代に語り継ぎたい」と話している。

生い立ちなど伝える本刊行

奉賛会

乃木静子夫人奉賛会は、静子の生い立ちや横顔を伝える「乃木静子夫人小伝」を刊行した。2000部を作り、会の事務局を置く船魂神社や照国神社、尚古集成館（いずれも鹿児島市）などで販売する。

同館の田村省三館長の著作で全13章。熱心に学問に取り組んだ鹿児島時代の様子や、乃木家での清貧な暮らしぶりを生前の写真付きで掲載している。田村館長は「決して順風満帆な生涯ではなかったが、知られざる静子の生き方や人柄が伝われば」と話す。

A5判91ページ。1冊1000円。希望者には郵送での注文も受け付ける。問い合わせは同会（099・226・7457）へ。